

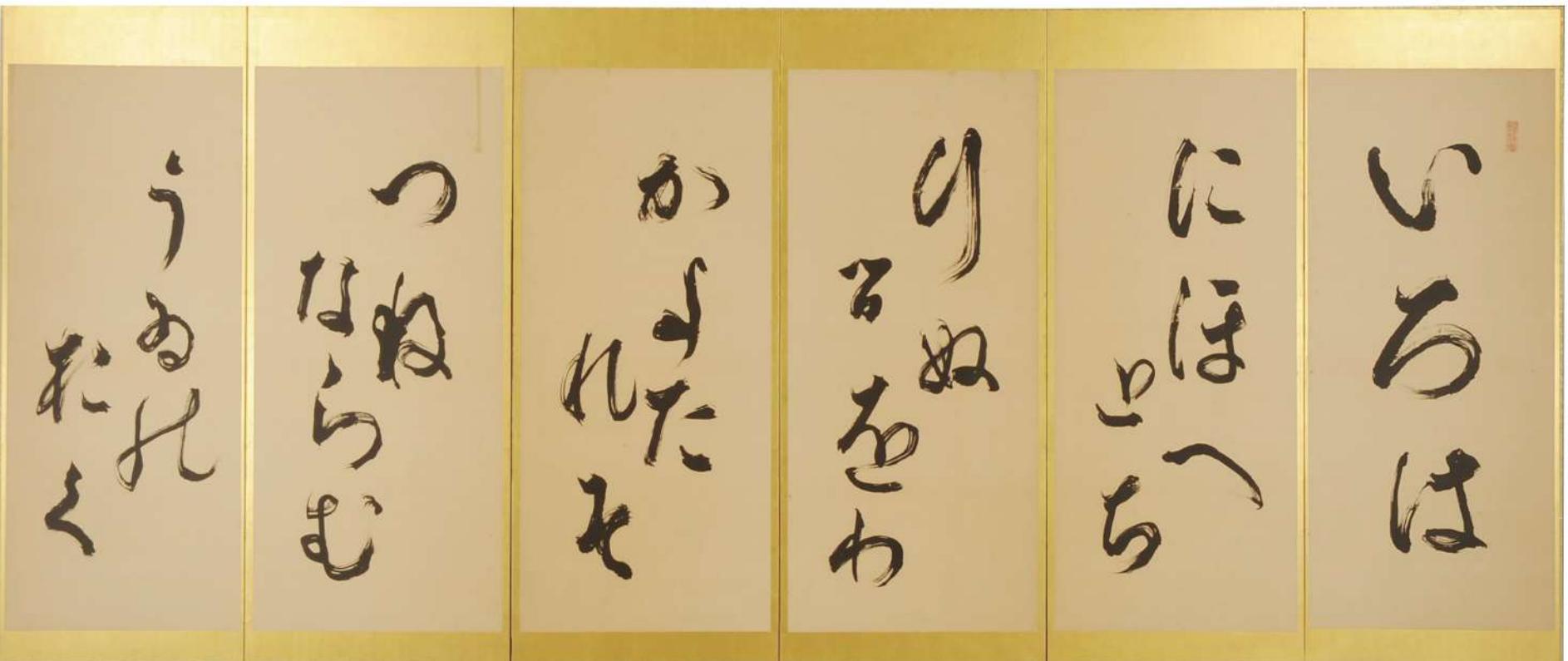
9、いろは大字屏風

貫名菘翁

安政四年（一八五七）各扇一三三・一×五四・九cm 紙本墨書 観音正寺所蔵



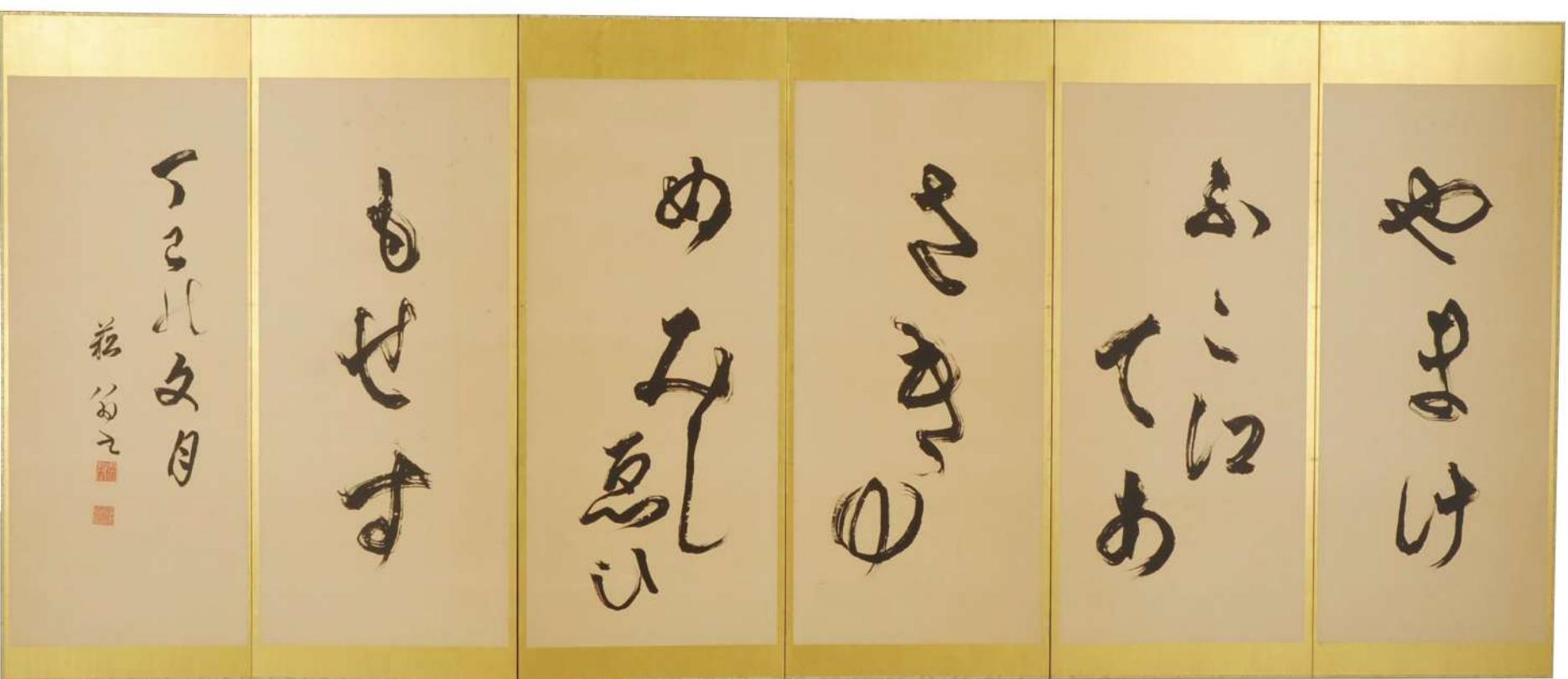
「須靜堂」
7.2×2.6cm



「君茂」
4.6×4.8cm



「世味年来薄似紗」
4.5×4.8cm



菘翁が弘法大師空海作の伝承がある「いろは」四十七文字を、一双の屏風にダイナミックに書いた作品である。菘翁作の「いろは屏風」は、文久元年（一八六二）作、万延元年（一八六二）作が知られていたが、この観音正寺所蔵作品は、八十歳時に書かれた新出の作品で、右隻第一扇に三文字、第二扇から六扇までが五文字、左隻は、第一・三・五扇が三文字、第二・四扇が五文字と交互になり、第六扇を款記のみとするなど、四十七文字の配置において、大胆な手法を見せている。

菘翁は若かりし頃、空海の作品にふれその書を学んだという。空海の書風を学んだのは、高野山へ入山しただけでなく、出生の阿波が空海の出生地である讃岐国多度郡と近いこととも関係しているよう。そして「いろは歌」は、承暦三年（一〇七九）成立の『金光明最勝王経音義』を文献上の最古の例として、この時代より、真言宗の学僧の間で広く学ばれていたものであり、空海作という俗説まで流布していた。菘翁にとって、空海作の伝承を持つ「いろは」四十七文字を書こうとするのは、自然のことではなかつただろうか。

また、「いろは」四十七文字は、当然のごとく、読み書きを学ぶ上で基本のものである。菘翁が地域の後進の育成に励んでいたのであれば、教育的配慮の下で書いたものかもしれない。